

報告

高大連携の理想モデルを探る
 ～さまざまな連携例から見えてくること～
 (2018年度全国大会教育連携部会企画報告)

奥山 則和^A



写真提供：大会実行委員長・クマーラ教授

2018年10月20・21日に、名城大学ナゴヤドーム前キャンパスにて開催された第6全国大会において、10月21日の9時30分から10時30分に標題の企画が開催された。開催意図は以下の通り。

教育連携部会では、関東支部大会で高大連携企画を2度実施した。高大連携といえば大学側に負担が掛かりがちなイメージが多いなか、そうではない連携を発信してきている。初等・中等教育から高等教育を経て社会へとスムーズな「トランジション」を考慮した教育課程の編成が求められる現在、さまざまな事例から学校と大学間の効果的な「連携」の形を模索することは意義があると思われる。

本企画は、奥山がモデレーターとなってリードし、3名のパネリストが議論した。パネリストの発表テーマは、以下の通り。

伊藤高司氏：大学生が高校に戻ってくる連携

川名典人氏：大学から高校生に活動を提供

高城宏行氏：K-16カリキュラムの研究

まずは、パネリストの三方が、それぞれの現状を簡潔に発表した。

名城大学附属高等学校の伊藤高司教諭が、「学校インターンシップ」について紹介した。名城大学外国語学部が今年度始めた企画で、教職を目指す学生に学校現場で体験的な活動を提供するものである。

学校教育法や学習指導要領に則って教育活動を行わなければならない「学校」内での活動となるので、大

A: 学校法人桐蔭学園グローバル教育センター
 グローバル人材育成教育学会教育連携部会長

学生に好きなように授業内で活動させられないもどかしさはあるようだ。しかし、大人ではなく、高校生と年齢が近い大学生による（「留学はいいよ」などの）声掛けは、効果的であるという報告だった。

次に札幌国際大学の川名典人教授が、大学教員が高校生に提供する高大連携について、報告した。彼は、前年に北海道情報大学で行われた第5回全国大会で、北海道を例に観光立国日本をどう支えるかについてのシンポジウムにも登壇している。

ICTを駆使し、遠隔地の斜里にいる生徒に対してさまざまな実践的な英語教育の場を提供されてきた氏の報告は、どの内容も刺激的であった。生徒たちにとって身近な地元を題材に、毎年形を変えながら「英語を使う」場面を創り出すことは、英語学習に意義を与える上でも、英語を実践的に使用する場づくりとしても、見習いたい。

玉川大学の高城宏行准教授は、玉川大学・学園と、京都教育大学とその附属校とを例に、幼稚園から大学まで一貫教育が、いまどのようになされており、どのような課題があるかについて、報告した。

一貫教育をデザインしても、各学校間に入試があり児童・生徒・学生が必ずしも同じシステムに上がっていかないという問題点があることが指摘された。また、教員養成に必要な情報として今後期待されるグローバル人材像は提供されるものの、学生自身がグローバル

に活躍する場があまりない、といった問題提起もあった。

パネリストたちの報告を踏まえ、司会が3人の方でのQ&Aをリードしていき、次第に議論は会場にいた聴衆にまで広がった。

残念ながら、時間の制約もあり、標題に掲げたような「理想像」のイメージがつかめるまでには至らなかった。しかし、高大連携を含むさまざまな機関の連携の重要性が指摘されているこの時期に、こうして多くの人を巻き込んで議論する場を設けられたことには意義があったと感じている。パネリストとしての役割を快諾くださった三氏、全国大会での企画実施に許可をくださった実行委員の皆さま方には深く感謝している。

今回特記すべきこととして、写真にあるように多くの高校生がこのシンポジウムを聴いてくれた。これは、同会場で名城大学と名城大学附属高校の学生・生徒による「高大接続連携シンポジウム2018・学生たちが考えるグローバル化」という企画を観に来た生徒たちだ。教育に携わる大人たちが真剣に教育をよりよいものにするために議論するさま、そしてどのようなことを議論しているかを体感できたはずだ。

今回の全国大会の特徴である、多様な参加者たちがいたという一つの事例として、ここに記しておきたい。

受付日 2019年1月15日、受理日 2019年3月16日